



TITLE:

『サラムボー』における侵入と融合：城壁と民族の血をめぐって

AUTHOR(S):

長澤(元野), 規子

CITATION:

長澤(元野), 規子. 『サラムボー』における侵入と融合：城壁と民族の血をめぐって. 仏文研究 1984, 13: 145-179

ISSUE DATE:

1984-02-07

URL:

<https://doi.org/10.14989/137677>

RIGHT:

『サラムボー』における侵入と融合

— 城壁と民族の血をめぐって —

長 澤 規 子

(旧姓 元野)

序

『サラムボー』は、ポリュビオスの『総史』に叙述されたカルタゴに対する傭兵軍反乱を骨子としながら、フローベールの創案によるハルミカルの娘サラムボーと傭兵隊長マトーとの恋を、戦争に比肩するもう一つの主軸としている。Jean Rousset は《Positions, distances, perspectives dans *Salammbô*》と題された論文¹⁾において、この小説では恋にも戦争にも、距離が優位を占め接触が忌避されるという一定法則があることを指摘し、それを《la passion des distances》と称した。この巧みな構造分析以前にも、Victor Brombert が、戦争も恋も《quest for the unattainable》であるとし、《all sense of distance》という言葉を用いている²⁾。我々は両者の主張する距離の大きな意義を認めながらも、逆に、この距離を埋めようとする努力に分析の焦点をあて、この小説における侵入と融合の重要性を明らかにしたいと思う。同時に、従来、タニットとモロックの対立或いは聖衣ザインフといった神話要素に、戦争と恋の両軸を統合する機能が見出されてきた³⁾のに対し、我々は小説の整合性の核を侵入と融合のテーマに求めたい。そしてこの観点から、これまで認められながらも分析されてこなかった両軸の直接的関連性⁴⁾を明確にしようとするものである。

I

この小説で城壁は頻繁に登場する。E.-L. Ferrèreによると、カルタゴ城壁は、執筆当時これ以上の正確さは望めないほど、客観的に描かれているということである⁵⁾。我々は描写の信憑性よりも、フローベールが城壁のどのような側面を強調し、どのような意味を付与しようとしたかを考察したい。

1. 城壁＝民族階級の象徴

カルタゴ内部にある城壁が三度言及されていること、そしてそれらが戦闘の防壁としてではなく、民族階級の象徴として姿をみせることは、我々にとって有力な手掛りとなる。まず示されるのは、廃残物としての囲い壁である。

On distinguait les enceintes des trois vieux quartiers, maintenant confondues; elles se levaient çà et là comme de grands écueils, ou allongeaient des pans énormes, [...] (IV, 754)

無用にみえるこの壁が実は、少なからぬ重要性を有している。土着民の子孫も侵入者たるフェニキア人の末裔も、今ではカルタゴの名の下に統一集団を形成しているとはいえ、民族意識が根強く両者を隔てている。内部城壁はこの潜在する民族階級意識を具現するものに他ならない。

Il (= Hamilcar) faisait travailler aux remparts, et, pour avoir des pierres, démolir les vieilles murailles intérieures, à présant inutiles. Mais la différence des fortunes, remplaçant la hiérarchie des races, continuait à maintenir séparés les fils des vaincus et ceux des conquérants; aussi les patriciens virent d'un œil irrité la destruction de ces ruines, tandis que la plèbe, sans trop savoir pourquoi, s'en réjouissait. (VIII, 838)

そして、民族間の境界たる城壁は、異民族を排するものとして描かれている。外壁に一番近く、カルタゴの最も外側の地区マルカに住むのは、「土着の家族の出身でカルタゴのことは平生関心をもたない」人民である。彼らは傭兵戦争を通じて「カルタゴへの帰属意識を高めた⁶⁾」にも拘わらず、城壁に庇護されるどころか、傭兵がカルタゴを包囲した際、城壁ゆえに絶命に追いこまれる。

La partie du rempart qui s'étendait depuis l'angle des portes⁷⁾ jusqu'à la hauteur des citernes fut enfoncée. Alors les gens de Malqua se trouvèrent pris entre la vieille enceinte de Byrsa par derrière et les Barbares par devant. Mais on avait assez d'épaissir la muraille et de la rendre la plus haute possible sans s'occuper d'eux; on les abandonna; [...] (XIII, 929)

このように異民族を排除する城壁の動きは、より純粋な民族集団を志向するカルタゴの排他性を象徴している。

カルタゴの外壁もまた、単なる防壁に留まらず、内部城壁と同様、他民族との境界という側面が強調されている。それは同時に、文明と野蛮、秩序と無秩序の境界でもある。カルタゴの均質さに対し、城外に住む人々の猥雑な様子が詳述されるのである。

Il y avait en dehors des fortifications des gens d'une autre race et d'une origine inconnue, — tous chasseurs de porc-épic, mangeurs de mollusques et de serpents. [. . .] Leurs cabanes de fange et de varech s'accrochaient contre la falaise comme des nids d'hirondelles. Ils vivaient là, sans gouvernement et sans dieux, pêle-mêle, complètement nus, à la fois débiles et farouches, et depuis des siècles exécrés par le peuple, à cause de leurs nourritures immondes. (IV, 756–757)

アフリカのありとあらゆる部族が、傭兵の援軍としてカルタゴ包囲に集積した時も、「そのたずさえた武器は衣服や民族におとらず種々雑多であった⁸⁾」。彼ら蛮族にとって「太陽のように豪華で、神のように恐ろしい、あの偉大なカルタゴ⁹⁾」とは、何よりも城壁として現われる。彼らのカルタゴへの感情が、城壁に対する感情に置換されているのである。それは困惑と不安であったり、恐怖であったりする。

Ils étaient incertains, éprouvant cet embarras que la rencontre des murailles inspire toujours aux Barbares. (VI, 787)

[. . .] ; des Nomades qui n'avaient jamais vu de ville étaient effrayés par l'ombre des murailles. (XII, 914)

この城壁の威容により、内部の神秘性が一層高められ、外部者を眩惑するのだ。蛮人も傭兵も「その高い城壁を遠くながめて、そのうしろに限りない享楽を夢みていた¹⁰⁾」。

実際、傭兵やアフリカの蛮族にとって、民族の境界＝カルタゴ城壁を乗り越えること、これを破壊し消滅させることが、この小説における戦いの本質であるように思われる。逆にカルタゴにすれば、城壁を固守し外部の侵入を阻止することが、民

族の自己同一性の確証である訳だ。勿論、カルタゴ攻城が語られるのはわずか一度にすぎず、しかも勝敗を決するのは、斧の峽道及びラーデスの平野における戦いである。しかしながら、戦役の概要が史実によって規定されている以上、フローベールに変更の自由はない。我々に重要なのは、後述するように、作者がカルタゴ攻城に際し「典型的な包囲攻撃をでっちあげ」 或いは「誇張¹¹⁾」したという事実である。

ここでは城壁をめぐる両者の動きを追ってみよう。カルタゴ人民が、ひとたび城内に集合させた傭兵をシッカへ追放するのは、ポリュビオスの記述では紛争を恐れて¹²⁾ のこととなっている。が、この小説においては、傭兵たちが滞留することへの懸念からである。

Tous, cependant, étaient opprimés par la même inquiétude; on avait peur que les Barbares, en se voyant si forts, n'eussent la fantaisie de vouloir rester. (II, 726-727)

一方傭兵の側には、城壁に隠された内部への好奇心と憧憬が常に存在する。彼らは「都会のなかの滞留にあきあきしていた¹³⁾」からこそ退去したにも拘わらず、再びカルタゴに押し寄せた時、恋情にも似た愛憎いりまじる感情を抱きながら、内部に魅せられている。

Ce spectacle de Carthage irritait les Barbares. Ils l'admiraient, ils l'exécraient, ils auraient voulu tout à la fois l'anéantir et l'habiter. (IV, 755)

そして「市街から完全に隔てられている¹⁴⁾」ばかりか三重の城壁に守られた軍港は、近づき難い故に、彼らの関心を惹くのである。

Mais qu'y avait-il dans le Port-Militaire, défendu par une triple muraille? (Ibid.)

さて、カルタゴ攻城において、フローベールが敢えて史実を曲げた次の点に注目する必要がある。Ferrère も指摘するように¹⁵⁾、『総史』では、包囲の際ハミルカ

ルは野戦にあたっていた。ところがフローベールは、頭領をカルタゴ城内へ戻らせると共に、これを追撃する傭兵たちとの城壁をめぐる攻防を描いた。我々には、両軍の境界としての不動堅牢な城壁・城門の存在を強調するため、この戦いが必要とされたように思われる。

Les deux armées se rapprochaient, allaient se toucher. Mais la porte de Malqua, la porte de Tagaste et la grande porte de Khamon déployèrent leurs battants. Le carré punique se divisa; trois colonnes s'y engloutirent, elles tourbillonnaient sous les porches. Bientôt la masse, trop serrée sur elle-même, n'avança plus; les piques en l'air se heurtaient, et les flèches des Barbares éclataient contre les murs.

[...] , les Carthaginois s'étaient rejoints; ils entrèrent; la porte énorme se referma derrière eux, en retentissant.

Elle ne céda pas. Les Barbares vinrent s'écraser contre elle; [...] (XII, 910-911)

先程の、傭兵をシッカへ追いやる場面でも、城壁は両者の分割線として機能している。「カルタゴ人民は彼らが立ち去るのを見物するために、城壁のうえにのぼり」「彼らが通り過ぎてしまうと、時をうつさず城門の扉が閉ざされた。が、人々はなかなか城壁のうえからおりなかった」。カルタゴを振返る傭兵の目に映るのは「うつろな矢狭間を空のはてにきざんでいる、ながい城壁¹⁶⁾」だけである。彼らがカルタゴへ引き返した時も「城門はただちに閉ざされた¹⁷⁾」。

しかし、城壁によって一線を画すカルタゴと傭兵、文明と野蛮の対立が表面的なものにすぎず、両者に様々な等質性を見出せることは、既に多くの研究者の認めるところである¹⁸⁾。Levinの表現を借りれば、カルタゴもまた «institutionalized barbarism¹⁹⁾» である。が、それ以上に我々は、傭兵の露营地とカルタゴ城壁が類似点をもつことに注目したい。まず、傭兵にとって陣営とは祖国であり家庭である。

La communauté de leur existence avait établi entre ces hommes des amitiés profondes. Le camp, pour la plupart, remplaçait la patrie; vivant sans famille, ils reportaient sur un compagnon leur besoin de tendresse, [...] , il s'était formé d'étranges amours, unions obscènes aussi sérieuses

que des mariages, […] (XIV, 967)

そして城壁がカルタゴの境界を標す様に、陣営もまた囲障による境界をもち、城門にも似た狭小な入口が設けられている。

Un rempart de gazon enfermait l'armée dans une haute muraille, inébranlable au choc des catapultes. (IV, 757)

Les soldats laissaient enter chez eux tous les Carthaginois, mais par un seul passage tellement étroit que quatre hommes de front s'y coudoyaient. (IV, 758)

カルタゴが異民族に城門を閉ざすだけでなく、純血主義のあまり城壁を収縮・後退させたのに対し、傭兵の陣営はこのように外部に開かれている。これは、城壁を乗り越えることが不可能なら逆に、カルタゴ人民を自らの境界の中へ取り込もうとするかに思われる。カルタゴ人民が露营地を訪れるというこのエピソードは、作者の創案であるが、一体、どのような意味をもつものであろうか。「カルタゴに上陸すれば都会を自分たちの手にゆだねられる」と信じていた傭兵、「名もない雑兵」が「王冠をいただく身分になる²⁰⁾」幸運を夢みていた彼らにとって、カルタゴ集積とは、単に空間を占有することではなく、輝かしい民族の一員になることをも意味していたはずである。作者が新たに挿入した傭兵たちの結婚の要求は、露营地のエピソードと相俟って、この小説における戦争が領土の侵犯のみならず、民族の血の交流をも賭けたものであることを物語っていよう。

Le Grand-Conseil aurait faibli, peut-être, sans une dernière exigence plus injurieuse que les autres: ils demandèrent en mariage, pour leurs chefs, des vierges choisies dans les grandes familles. C'était une idée de Spendius, que plusieurs trouvaient toute simple et fort exécutable. Mais *cette prétention de vouloir se mêler au sang punique* indigna le peuple; on leur signifia brutalement qu'ils n'avaient plus rien à recevoir. Alors ils s'écrièrent qu'on les avait trompés: […] (IV, 760)

カルタゴにとって異民族と血縁関係を結ぶことは、彼らの自己同一性の喪失に他

ならず、これほど受け入れ難いものもないことは、城壁に付与された意味からも明らかである。この観点からすれば、小説のもう一つの軸、マトーとサラムボーの恋そして性的結合が、カルタゴの民族主義と直接関わりをもつ問題であることが理解されよう。自ら傭兵の陣営へ赴き、マトーに身をまかせたサラムボーを罵るジスコの絶望は、この文脈において捉えられなければならない。

Quand même j'aurais vu contre elle (=Carthage) toutes les armées de la terre, et les flammes du siège dépasser la hauteur des temples, j'aurais cru encore à son éternité! Mais, à présent, tout est fini, tout est perdu! Les Dieux l'exècrent! Malédiction sur toi qui as précipité sa ruine par ton ignominie! (XI, 894)

たとえ領土が侵犯されようと、種族の血そのものが犯されてはならぬというカルタゴの想いは、実は、先程の露营地の描写にも窺うことができる。両者は決して融合することがない。

Le camp ressemblait à une ville, tant il était rempli de monde et d'agitation. Les deux foules distinctes se mêlaient sans se confondre, [. . .] (IV, 758)

しかし、「近隣の国民が波浪のようにその周囲でわめきたて、わずかな嵐でもこの膨大な機構を動乱させる²¹⁾」というカルタゴの必然的末路は、侵入する傭兵によって押し倒されるジスコのテントに投影されている。

Les réclamations, les plaintes se multiplièrent. Les plus obstinés pénétraient dans la tente du Suffète; [. . .] A chaque minute, il arrivait comme des tourbillons d'hommes; les tentes craquaient, s'abattaient; la multitude serrée entre les remparts du camp oscillait à grands cris depuis les portes jusqu'au centre. (VI, 763)

無論、この小説でカルタゴは勝利する。けれどもこれが束の間のはかない勝利であることを我々は知っている。遠からずローマに敗北し、カルタゴ文明は灰塵に帰

す。その意味で、純潔そのものの処女サラムボーが ≪ prostitutions religieuses²²⁾ ≫ を経て死に至る運命は、カルタゴの未来を予示するものだ。民族の象徴である城壁を固守しながら、カルタゴは「暗殺者に取りかこまれた人間のように、四方から死がせまっているのを感じ²³⁾」ているのである。

2. マトーにおける障壁

我々の考えるように、フローベールが民族の領土且つ階級の境界に戦いの本質を見出したとしても、境界＝城壁をめぐる攻防は史実の枠から逸脱できない。そこで作者は、マトーにおいて戦争を恋に移行させることにより、障壁としての城壁を描く自由を確保したように思われる。城壁が傭兵とカルタゴの境界であるなら、それは自動的に、それぞれの民族集団を代表或いは象徴する人物、マトーとサラムボーの障壁となる。マトー自身の言葉どおり、彼はサラムボーの許へ行くため、彼女を我がものとするため、城壁を破壊しようとするのだ²⁴⁾。マトーは何よりも、障壁に盲目的に突進する人物として提示されている。彼は距離をおいて対象を眺めることがなく、ひたすら自己破壊的盲進を繰り返す。

Plus de vingt fois il fit le tour des remparts, cherchant quelque brèche pour entrer. Une nuit, il se jeta dans le golfe et pendant trois heures, il nagea tout d'une haleine. Il arriva au bas des Mappales, il voulut grimper contre la falaise. Il ensanglanta ses genoux, brisa ses ongles, puis retomba dans les flots et s'en revint. (IV, 755)

これを単に、「サラムボーをとじこめているカルタゴ」 いわば「彼女を我がものにして男²⁵⁾」への嫉妬といった、恋の次元だけで捉えてはなるまい。彼は、障壁を越えようとする意志と努力を、最も十全に具現している人物なのである。Thibaudet がいみじくも述べたように、マトーの欲望は、一方では「魔術にかけられた男の恋」を表わすが、他方、「反乱軍兵士たちの集団的魂をカルタゴの周辺に引きとどめ、カルタゴ攻略の念に燃えたたせる激烈な欲望と一体化している²⁶⁾」のである。カルタゴ同様三重の城壁をもつ、ヒッポ・ザリツス攻囲の時にも猛進する彼の姿がある。

Souvent il faisait sonner l'assaut, et, sans rien attendre, s'élançait sur le

môle qu'on tâchait d'établir dans la mer. Il arrachait les pierres avec ses mains, bouleversait, frappait, enfonçait partout son épée. Les Barbares se précipitaient pêle-mêle; [...] (VI, 792)

壕と胸壁に防禦されたハミルカルの陣地へも同様に突進してゆく。

« Vous êtes tous des lâches! » s'écria Mâtho.

Et, avec les meilleurs, il se précipita contre le retranchement. Une volée de pierres les repoussa; [...] (IX, 862)

しかし、猛進すべき対象は、やはりサラムボーである。彼らの出会いそのものが、サラムボーに « ta colère était si forte que tu as bondi vers moi et qu'il a fallu m'enfuir!²⁷⁾ » と回想される如く、猛進で始まっている。

Mâtho avançait en donnant de grands coups avec sa tête. Quand il la releva, Narr'Havas avait disparu. Il le chercha des yeux. Salammbo aussi était partie.

[...] Il s'élança.

On le vit courir entre les proues des galères, puis réapparaître le long des trois escaliers jusqu'à la porte rouge qu'il heurta de tout son corps. En haletant, il s'appuya contre le mur pour ne pas tomber. (I, 722)

彼女の部屋の「壁をさぐりながら露台をひとまわり」するマトーの姿は、カルタゴ城壁を一周する姿にも一致する。事実、城門のように固く閉ざされたサラムボーの部屋の扉 « la porte rouge à croix noire » は、彼を惹きつけて止まない。

Les yeux de Mâtho à chaque instant s'y(=au palais d'Hamilcar) portaient. [...] et la porte rouge à croix noire restait constamment fermée. (IV, 755)

「体を震わせながら、眼を皿のようにして」「高い館の露台を視つめる²⁸⁾」マトーの微笑と涙は、カルタゴに対する傭兵や蛮族の想いと共鳴し合うものだ。「あり

ふれた人間の娘とは全然ちがう²⁹⁾」サラムボーヘマトーが抱く、恋しさと憎しみ。これは、既にみた、カルタゴを「滅ぼしたく、またこれに住みたいく」思う傭兵の背反する感情に呼応している。いずれも、神格的存在を畏怖しながら、これを所有したいという欲望、即ち冒瀆的欲望である。そして、侵犯を禁じられた、いわば聖なる境界として、傭兵の前に城壁が立ちはだかり、マトーの恋においては、城壁に加えてサラムボーの部屋の扉が侵入を阻むのである。

以上、我々には、作者が戦争における境界侵犯行為に着目し、この冒瀆的欲望を、戦闘のみならずマトーとサラムボーの恋において、一層自由に展開させたのだと思われる。ここには、傭兵軍の「冒瀆的な残虐さ³⁰⁾」といった、『総史』にみられる倫理的意味はいささかも含まれていない。描かれたのは、聖なる境界を越え侵入しようとする欲望そのものである。マトーとサラムボーの隔絶は、傭兵とカルタゴの心理的・物理的隔たりに勝る。作者はまず、想像上の人物サラムボーを神秘的雰囲気で覆った。次に、史実上の人物マトーをどのように規定したかは、注目に値する問題であろう。果たしてフローベールは、『総史』で全く触れられていない彼の信仰に焦点をあてたのである。

Il était né dans le golfe des Syrtes. Son père l'avait conduit en pèlerinage au temple d'Ammon. [...] Il craignait les Dieux et souhaitait mourir dans sa patrie. (II, 729-730)

この一節について Ferrère は、作者の想像力によって付与された夢想と憂鬱が、この人物に魅力を添えていると言うが³¹⁾、我々にはそれ以上に、神への畏怖を予め用意することにより、侵犯行為の困難さ、重大性を増そうとしたのだと思われる。

II

Brombert が指摘するように³²⁾、この小説には侵入 *pénétration* が何度も現われる。その中で、タニット神殿に秘蔵された聖衣ザインフを盗むという文字通りの冒瀆行為が、侵入の最たるものとして描かれている。これは、我々の考察からすれば必然であると言えよう。さて、我々は侵入及び合体・融合の個々の具体例を、主体・客体・両者の間に設定された障壁の三点に留意しながら分析を行なう。そして、

従来あまり注目されてこなかった、これらの緊密な相互の連関を明らかにしたいと思う。恣意的になるのは免れないが便宜上、侵入及び合体を、戦史に依拠するものとそれ以外のものに二分し、Ⅱ部では後者を取りあげることにする。当然ながら、作者の想像の自由が多く許される後者の方が、描かれる頻度も高いからである。また、分析の際、物語の時間の流れに従うのは、作者も意識的にそのような順序をとったと思われるからである。

1. 侵入

小説の冒頭、ハミルカルの庭園における饗宴は、傭兵がカルタゴ城壁内部に集積している点で、既に境界の侵犯である。それは、傭兵の不安を通じて示唆されている。

Le festin recommença. Mais Giscon pouvait revenir, et, cernant le faubourg qui touchait aux derniers remparts, les écraser contre les murs. Alors ils se sentirent seuls malgré leur foule; [...] (I, 715)

次に作者は、障壁及びその向こう側に神格的存在を設定し、傭兵をあらたな侵入へと導く。ここでの障壁は「藤づるをあんだ高い囲牆」*une haute barrière faite en jonc des Indes*であり、兵士たちはこの錠前の紐を短剣で切って、館の掠奪へと赴く³³⁾。傭兵にとって頭領ハミルカルは「死ぬはずのない³⁴⁾」「不死身³⁵⁾」の存在。従って、その館は侵入してはならないものだ。

[...] , il (=le palais d'Hamilcar) semblait aux soldats, dans son opulence farouche, aussi solennel et *impénétrable* que le visage d'Hamilcar. (I, 710)

この侵入がハミルカルへの一種の冒瀆であるとするなら、彼らがバルカ家秘蔵の魚を熱湯に投げ込むのは、さらに意識的な冒瀆である。

Les soldats, en riant beaucoup, leur (=à de gros poissons) passèrent les doigts dans les ouïes et les apportèrent sur les tables.

C'étaient les poissons de la famille Barca. Tous descendaient de ces lottes primordiales qui avaient fait éclore l'œuf mystique où se cachait

la Déesse. L'idée de *commettre un sacrilège* ranima la gourmandise des Mercenaires; ils placèrent vite du feu sous des vases d'airain et s'amuserent à regarder les beaux poissons se débattre dans l'eau bouillante. (I, 716)

眼のおくに「タニットの神秘がくるめいていた³⁶⁾」というこの魚への暴虐は、スペンディウスとマトーがタニット神殿へ闖入するという、前代未聞の冒瀆を用意するものだ。両者の関連は、冒瀆という行為の意味に留まらず、描写において多くの類似要素が見出せることから明らかにする。神殿の描写は長きに及ぶが、ハミルカルの庭園で描かれたものの殆んどすべてが、その中に含まれている³⁷⁾。そして、侵入の観点から我々の注意を引きつけるのは、神殿の障壁の多さである。「積石の小さい扉³⁸⁾」でかこまれた庭の中に、「囲い」enceinte が三重にあり、さらに玄関の前には「銀線細工の垣³⁹⁾」がある。建物の内部は迷宮のようであって、二人は幾度となく侵入を阻まれている。

Le temple était, de ce côté comme de l'autre, *impénétrable*. (V, 773)

しかも、物理的障壁の多さに加えて、作者は心理上の障壁の存在を強調するのである。

La terreur, plus que les murs, défendait les sanctuaires. Mâtho, à chaque pas, s'attendait à mourir. (V, 774)

このように、カルタゴ城壁、ハミカル館、タニット神殿はすべて、内側に神格的存在或いは神そのものを保有し、障壁と畏怖によって侵入を禁じられている。従って、サラムボーを「女神と混同⁴⁰⁾」しているマトーが、彼女の部屋に侵入するのも、以上の侵入の延長上に位置づけられる。まず描写において、ハミルカルの庭園及びタニット神殿への侵入場面と共通する要素を拾うことができる⁴¹⁾。そして、この侵入の際にも、作者は、障壁たる例の扉を描くのを忘れはしない。

Le dernier étage, plus étroit, formait comme un dé sur le sommet des terrasses. Mâtho en fit le tour, lentement.

[...] Il reconnut la porte rouge à croix noire. Les battements de

son cœur redoublèrent. Il aurait voulu s'enfuir. Il poussa la porte; elle s'ouvrit. (V, 778-779)

神殿侵入時に「不敬な企みが成功しないようにねがった⁴²⁾」マトーが、女神そのものとも言えるサラムボーの部屋に侵入できるのは、聖衣ザインフの獲得によって「*Me voilà plus qu'un homme, maintenant*⁴³⁾」という幻想を抱いたからである。まさに、「神々の力ぞえがなければ⁴⁴⁾」実現されえなかった魔術的行動に他ならない。作者は「*il crut apercevoir [...]*」*il crut voir [...]*⁴⁵⁾」等々の表現を用いて、マトーの知覚の現実性を希薄にすると共に、次の一節で、彼の夢幻状態を明示している。

En se retrouvant aux places où il l'avait (l'=Salammbô) déjà vue, l'intervalle des jours écoulés s'effaça dans sa mémoire. Tout à l'heure elle chantait entre les tables; elle avait disparu, et depuis lors il montait continuellement cet escalier. Le ciel, sur sa tête, était couvert de feux; la mer emblissait l'horizon; à chacun de ses pas une immensité plus large l'entourait, et il continuait à gravir *avec l'étrange facilité que l'on éprouve dans les rêves*. (V, 778)

今や障壁はすべて、一度乗り越えられた。四つの侵入を主体と客体の点からまとめると、1. 傭兵→カルタゴ、2. 傭兵の一部→ハミルカル、3. スペンディウスとマトー→タニット、4. マトー（スペンディウスはこの場に存在するが殆んど言及されない）→サラムボー、となる。侵入が、集団から個人へと秩序だって、進められてきたことが理解される。そして各段階ごとに、侵入の困難さも増大し、最後の侵入は神秘的幻想の助けを借りて初めて、達成されたのである。加えて、傭兵のカルタゴ集積を除いたあとの三つの侵入時に、必ず歩行困難が生ずるのも興味深い。障害は足元にも存在するのだ。まず、兵士たちのつまずき。

Les soldats s'éclairaient avec des torches, tout en trébuchant sur la pente du terrain, profondément labouré. (I, 716)

次に、山猫の皮が敷かれた神殿の床は火に喩えられる。

Tout à coup, ils sentirent sous leurs pieds quelque chose d'une douceur étrange. Des étincelles pétillaient, jaillissaient; ils marchaient dans du feu. (V, 774)

女神の像が安置された広間の舗石はたわむ。

Mátho fit un pas, une dalle fléchit sous ses talons, et voilà que les sphères se mirent à tourner, les monstres à rugir; [...] (V, 775)

そして、サラムボーの部屋の床は、砂のようにも思われ、また高底があるため、マトーは何度もつまづいている。

Mátho effleurait les dalles incrustées d'or, de nacre et de verre; et malgré la polissure du sol, il lui semblait que ses pieds enfonçaient comme s'il eût marché dans des sables.

[...] Plusieurs fois il se heurta les pieds, car le sol avait des niveaux de hauteur inégale qui faisaient dans la chambre comme une succession d'appartements. (V, 779)

しかし、忘れてならないのは、最後の侵入がそれまでの三つの侵入の単なる延長ではなく、この小説における侵入の本質的な意味を担っていることである。既に述べたように、境界の侵犯は最終的に、民族の血の融合、即ち男女の性の結合を志向する。「わしの魂をそなたの息のなかにおぼれさせてくれ！唇がつぶれるまで、そなたの手に接吻させてくれ！⁴⁶⁾」という、マトーの一体化への願望は、文字通り、傭兵のカルタゴ侵入における究極の願望である。実は、これ以前の侵入にも性的意味が付与されている。侵入という行為それ自体が、性的イメージを喚起するものだが、それは、兵士たちがバルカ家の魚の「鰐に指を通す」仕草、マトーが聖衣の「裂け目に首をつっこみ、身体全体をつつむ⁴⁷⁾」動作に、より鮮明であろう。また、Marcel Segquier が指摘したとおり⁴⁸⁾、スペンディウスとマトーが大水道を通過し神殿に潜入する場面には、性の暗号とでも呼ぶべきものが四散されている。例えば、聖衣 « voile » を盗むこと « vol » « voler » から、不法侵入・強姦 « viol » « violer » を連想することができるし、Spendius と Mátho (SPerMATHOzoïde)にとって大

水道は羊水に満ちた子宮にも比べられよう。更に Brombert も取りあげた « *quelque fissure* » « *une brèche* » « *une fente* »⁴⁹⁾等々も、性的イメージを想起させる。このような指摘をふまえるなら、マトーの先導者としてカルタゴに侵入するスペンディウスが、カルタゴ名家の処女と傭兵隊長の結婚を提案した人物であるのは意義深い。聖衣を手に戻したマトーが彼を « *prostituteur!* »⁵⁰⁾と罵倒するのも、この侵入が性の結合と無縁でなかったことを示唆している。

以上のことから、作者がマトーとサラムボーの抱擁を頂点として、侵入の各段階を漸進的に発展させてきたことが理解しうる。抱擁は回避された。この失敗は同時に、傭兵全体のカルタゴに対する敗北を意味する。傭兵は再び城壁を越えることはできず、ましてや、血縁関係は結ばれるべくもない。

2. 合体・融合

マトーの側から果たされなかった合体は、サラムボーの « *prostitutions religieuses* »によって実現をみる。「神々の意志」「天の命令⁵¹⁾」に従うサラムボーのこの魔術的行動は、作者自身、彼女の「現実性に確信をもっていない⁵²⁾」と言うように、マトーの場合よりも神秘性が一層濃い。合体は、モロック神＝男性原理、タニット神＝女性原理、の表徴である太陽・火・雷、月・水、等々により、隠喩的に描かれている。が、この小論の目的はそのような表徴の機能を分析することではない。我々に重要なのは、隠喩によって実現される一連の合体がすべて、自ら相手側へ入来する形をとることである。これは、カルタゴ市民が傭兵の露营地へ自ら入ってゆくという、作者独自のエピソードと重なり合う。更に、合体は、侵入とほぼ同じく、1. 鳩→太陽、2. サラムボー→蛇、3. サラムボーとタニット神殿の使丁→傭兵の陣営、4. サラムボー→マトー、と集団から個人へ、或いは象徴レヴェルから具体へと、個別化の方向で進められる。しかも、後述するように、合体と侵入は様々な点で対照をなす。このことは、侵入・融合というテーマが、この小説の整合性を解く重要な鍵であることを物語っていよう。

合体の第一段階は、カルタゴの鳩の移住に見出すことができる。我々は同章で、鳩がタニット及びサラムボーの象徴の一つであることを知らされている⁵³⁾。よって、この鳥が男性原理の表徴である太陽へ滑翔する姿は、サラムボーの « *prostitutions religieuses* » を予示していると言えよう。

Une couleur de sang occupait l'horizon. Elles(=les colombes de

Carthage) semblaient descendre vers les flots, peu à peu; puis elles disparurent comme englouties et tombant d'elles-mêmes dans la gueule du soleil. Salammbô, qui les regardait s'éloigner, baissa la tête, [...] (X, 876)

次に、有名なサラムボーと蛇の抱擁——Sainte-Beuveによれば彼女が「蛇といちゃつく」*batifolant avec son serpent*⁵⁴⁾場面——が、マトーとサラムボーの抱擁に対する予備段階であることを、作者自身告白している⁵⁵⁾。多くの批評家がこの官能的場面と次章の抱擁とのイメージの連関を指摘してきた。ここで我々はむしろ、蛇と太陽の表徴関係を明らかにすることにより、この抱擁を他の一連の合体に結び付けたい。一般に蛇は、タニット及びカルタゴの象徴と考えられる。元来、脱皮が月の満ち欠けを想起させることから、古代宗教では蛇は月に関係づけられてきたし、カルタゴ人にとってそれは「国民的また個人的物神⁵⁶⁾」である。さらに、サラムボーの愛するこの蛇は、バルカ家の「精霊⁵⁷⁾」でもある。けれども、ハミルカル of 祖先がモロック神の別称メルカルトであり⁵⁸⁾、ハミルカル自身「太陽の庇護のもと⁵⁹⁾」にある水軍の頭領であるなら、この家の精霊は太陽とも緊密な関係にあろう。加えて、ハンノーの侍医デモナデスの言葉——「太陽から生まれた蛇⁶⁰⁾」——が、サラムボーと蛇の抱擁を鳩と太陽の合体に重ねることを可能にしてくれる。

タニット神殿の使丁に案内され、サラムボーが陣営へ出かける際、まず、境界たる城門が言及されることは注目に値する。

[...] ; et ils arrivèrent ainsi à la porte de Teveste.

Ses lourds battants étaient entre-bâillés; ils passèrent; elle se referma derrière eux. (XI, 881)

ここに始まる彼女の旅は、スペンディウスに先導されたマトーのカルタゴ侵入と、まず二人連れであるという共通点をもっている。が、後者の侵入が月のない夜、大水道といったタニットの湿潤のイメージそのものの中で行なわれたのに対し、前者は太陽の灼熱の下、荒廃した土地を進んでゆく。「砂漠のような」「耕すものもない田畑⁶¹⁾」が、殺戮と不毛の神モロックの姿であるのは自明である。

Puis le soleil se leva; il la (=Salammbô) mordait sur le derrière de la tête, et involontairement elle s'assoupissait un peu. (XI, 881)

Le soleil chauffait l'herbe jaunie; la terre était toute fendillée par des crevasses, qui faisaient, en la divisant, comme des dalles monstrueuses. (XI, 883)

また、マトーが侵入したサラムボーの部屋には、彼女の「濡れた足跡」があり、釣り床は「大きなとばりのような闇」に隠されていた⁶²⁾。一方、彼女が訪れた陣営は火が燃え、マトーのテントでは燭台があたりを照らしている⁶³⁾。

このようなタニットとモロックの対比よりも、我々には、サラムボーが陣営及びテントへ入る身振りの方が、はるかに重要である。

[...] , et ils longèrent la terrasse qui fermait le camp des Barbares. Une brèche s'y ouvrait, l'esclave disparut. [...]

Salammbô se rapprochait toujours; [...] (XI, 884)

« Suis-moi! » dit-il (=Mâtho).

La barrière s'abaissa; aussitôt elle fut dans le camp des Barbares. [...] (XI, 885)

Mâtho écarta la toile brusquement. Elle le suivit. (XI, 886)

これらに見られるのは、障害を全く伴わない滑らかな通過であり、歩行困難の中、障壁を乗り越えようとする侵入とは、正反対のものである。実はこの動きは、モロック神殿に入る人影の描写と一致している。幾重もの囲障をもつタニット神殿とは対照的に、モロック神殿には壁しか見えない。そして、先程の鳩の滑翔が紛れもなくそうであったように、吸いこまれてゆくような動きが描かれている。

Le temple de Moloch était bâti au pied d'une gorge escarpée, dans un endroit sinistre. On n'apercevait d'en bas que de hautes murailles montant indéfiniment, telles que les parois d'un monstrueux tombeau. [...]; et des ombres peu à peu s'évanouissaient comme si elles eussent passé à travers les murs. (VII, 808)

更に、この一連の滑らかな動きは、露营地へ自ら赴くカルタゴ市民の、気楽そうな足取りとも呼応していると思われる。

Ils vinrent au camp, sans colliers ni ceintures, en sandales découvertes, comme des voisins. Ils s'avançaient d'un pas tranquille, [...] (IV, 757)

侵入と様々な対照をなしながら進められてきた合体もまた、マトーとサラムボーの抱擁を最終段階としている。この抱擁が、雷や雨といった表徴を用いてにせよ、或いは、*« Je t'ai entendue râler d'amour comme une prostituée⁶⁴⁾ »* というジスコーの証言、切れた足枷を見た父ハミルカルの疑念などを通じてにせよ、隠喩的間接的にしか描かれず、Rousset の言うように「読者には半ば隠されて⁶⁵⁾」いる。*« la passion des distances »* という言葉に集約される彼の主張は、この描写法をもふまえてのことである。しかしながら、どういう形にせよ達成されたこの性的結合の担う重要性を軽視してはならない。戦争の次元で果たされなかった民族の融合が、*« une fatalité des dieux⁶⁶⁾ »* による魔術的恋において実現をみるという事実、そして、今からみるように、この抱擁が両者、殊にサラムボーに及ぼした重大な影響を考える時、我々にはむしろこの合体にこそ、作者の主張が潜んでいるように思われるのである。抱擁を境としたサラムボーとマトーの、それぞれの変貌を明らかにしてみよう。

タニットを狂信的に崇拜し、それ故に懊悩するサラムボーは、観念の囚われ人であり、自分の真の欲望を理解していない。しかし、抱擁を機に、彼女は徐々に現実を視つめる力を獲得してゆく。まず、タニットの聖衣ザインフへの幻滅が起こる。

Alors elle examina le zaïmph; et quand elle l'eut bien contemplé, elle fut surprise de ne pas avoir ce bonheur qu'elle s'imaginait autrefois. Elle restait mélancolique devant son rêve accompli. (XI, 893)

そして次の一節で、彼女の変貌が明示される。

Les angoisses dont elle souffrait autrefois l'(=Salammbô) avaient abandonnée. Une tranquillité singulière l'occupait. Ses regards, moins errants, brillaient d'une flamme limpide. (XIII, 925)

蛇に冷淡になり、勤行にも熱心でなくなった彼女の視線が「透明な光に輝く」のは、何を意味しているのであろうか。サラムボーの眼差しが、夜、月に向かうので

はなく、次のように、昼間、城壁の彼方の傭兵へと向けられること自体、既に一つの変化であるが、更に、彼女の視線による描写が続くのは、注目に値する。

Elle passait des journées au haut de sa terrasse, les deux coudes contre la balustrade, s'amusant à regarder devant elle. Le sommet des murailles au bout de la ville découpait sur le ciel des zigzags inégaux, et les lances des sentinelles y faisaient tout du long comme une bordure d'épis. Elle apercevait au delà, entre les tours, les manœuvres des Barbares; [...]
(XIII, 926)

そももこの小説において、サラムボーの視点はごく稀でしかない⁶⁷⁾。饗宴においても、傭兵に視つめられるものの、彼女の眼を通した描写はない。サラムボーは視る主体ではなく、視つめられる対象なのだ。それが最も顕著なのは、ハミルカルと会見する次の場面においてである。

Enfin elle arriva près d'Hamilcar, et, sans le regarder, sans lever la tête, elle lui dit: [...]

Cependant, il l'examinait avec une attention si âpre que Salammbô troublée balbutia: [...] (VII, 821)

Peu à peu, en haletant, Salammbô s'enfonçait la tête dans les épaules, écrasée par ce regard trop lourd. (VII, 822)

このようなサラムボーがマトーとの抱擁後、視る主体に変貌する。饗宴でナルハヴァスに凝視されていた彼女が、今度は自分の顔をヴェールで隠し、逆に彼を視つめている。

Narr'Havas ne parlait plus; Salammbô, sans lui répondre, le regardait. Il avait une robe de lin, [...] (XIII, 970)

この変貌した視線が探し求めるのは「身体つきの女らしい」「姉のような⁶⁸⁾」存在ナルハヴァスではなくて、「今なお自分を眩惑しているあのマトーの兇暴な力の再現⁶⁹⁾」である。かつて、男たちとは「野獣のような笑いと不様な手足とで空恐ろ

しい気持を与える⁷⁰⁾」ものであった。月の影響にすりかえられてきた彼女の性的抑圧が、遂に、突破口を見出したのである。ここで我々は、傭兵の陣地へ向かう途中、使丁が「これは病気の若者で遠い神殿におしてもらいにゆくのだ⁷¹⁾」と言ったことが、単に通行人を欺くための方便ではなく、まさしく真実であったことが理解できよう。サラムボーの眼差しが透明な輝きをもつのは、病気が治癒されたためなのだ。但し、彼女が自分の欲望の本質を自覚するに至るのは、マトー及び自らの死の直前でしかない。

Bien qu'il agonisât, elle le revoyait, dans sa tente, à genoux, lui entourant la taille de ses bras, balbutiant des paroles douces; elle avait soif de les sentir encore, de les entendre; elle ne voulait pas qu'il mourût!⁷²⁾ A ce moment-là, Mâtho eut un grand tressaillement; elle allait crier. Il s'abattit à la renverse et ne bougea plus. (XV, 993)

真実の発見が同時に死でもあるのは、既に *« abîme »* という語により暗示されている。この語はサラムボーに関して、四度登場する。まず、シャハバリムが「彼女のひそかな欲望をさえぎるどころか、反対にますますそれをそそりたて」るように放つ言葉——「月は野に男のあとを追う、恋にくるった女のように、いつも太陽のまわりをさまよっておるではありませんか⁷³⁾」——は、*« comme de larges éclairs illuminant des abîmes⁷⁴⁾ »* と喩えられる。果たして、サラムボーがマトーに身をゆだねた時、*« un abîme »* が突如現われ、彼女のあらゆる過去、「カルタゴやメガラや自分の屋敷や部屋」を「遠くへ、はてしない距離へ、しりぞけてしまった⁷⁵⁾」。Rousset が *« Etreinte des regards sans contact des corps⁷⁶⁾ »* と称した二人の再会の場面で、もう一度 *« abîme »* が言及される。

Mâtho regarda autour de lui, et ses yeux rencontrèrent Salammbo.

Dès le premier pas qu'il avait fait, elle s'était levée; puis, involontairement, à mesure qu'il se rapprochait, elle s'était avancée peu à peu jusqu'au bord de la terrasse; et bientôt, toutes les choses extérieures s'effaçant, elle n'avait aperçu que Mâtho. Un silence s'était fait dans son âme, *un de ces abîmes* où le monde entier disparaît sous la pression d'une pensée unique, d'un souvenir, d'un regard. Cet homme, qui marchait vers elle,

l'attirait. (XV, 992)

Roussetはこの場面を、1章においてサラムボーが饗宴に姿を現わす場面と《diptyque》を構成すると言う。確かに空間上の構図からすれば、この指摘は至当である。が、サラムボーの変貌という観点に立てば、彼女が《je voyais bien que tu voulais m'entraîner vers quelque chose d'épouvantable, *au fond d'un abîme*⁷⁷⁾》と回想した、マトーの侵入の場面、即ち、侵入の最終段階こそ、終章の《Noces à distance⁷⁸⁾》と対照をなすものだと思われる。

« Je t'aime! » criait Mâtho.

Elle balbutia: « Donne-le(=le voile de la Déesse)! »

Et ils se rapprochaient.

Elle s'avancait toujours, [. . .] avec ses grands yeux attachés sur le voile. Mâtho la contemplait, ébloui par les splendeurs de sa tête, et tendant vers elle le zaïmph, il allait l'envelopper dans une étreinte. Elle écartait les bras. Tout à coup elle s'arrêta, et ils restèrent béants à se regarder. (V, 781)

二人の言葉にも視線にもなんら交流はなく、互いが全く別の想いに駆られているこの場では、聖衣はとりもなおさず、サラムボーから現実を覆い隠すヴェールであったのだ。

一方、マトーにおいても、はるかに微妙な形ではあるが、11章を境に変化がみられる。マトーは盲進によって特徴づけられる人物であった。ところが、12章で再びカルタゴに辿り着いた時、彼の姿勢は逆に、サラムボーを自分の方へ招き寄せようとするものである。

Puis une joie l'emporta à l'idée de revoir Salammbô. [. . .] ; il ouvrait les bras, il envoyait des baisers dans la brise et murmurait: « Viens! viens! » un soupir lui gonfla la poitrine, et deux larmes, longues comme des perles, tombèrent sur sa barbe. (XII, 910)

Il convoqua Salammbô, mentalement, à un rendez-vous; puis il l'attendit. Elle ne vint pas; cela lui parut une trahison nouvelle, et désormais, il l'exécra. (XIII, 923)

更に、4章と13章におけるカルタゴ攻囲を比較した場合、顕著な相異を見出すことができる。かつて自己破壊的な虚しい侵入の試みを繰り返しただけのマトーが、今や、冷静に、遠方から徐々に接近を行ない、しかも果敢な突進によって唯一人、第二障壁まで侵入に成功している。

Mátho s'était d'abord retenu de combattre, pour mieux commander tous les Barbares à la fois. [...] , et du fond de la plaine il poussait les masses de soldats [...] Peu à peu il s'était rapproché; [...]

[...] , et avec sa grande épée dans les deux mains il s'était précipité par la brèche, impétueusement. [...], et il arriva tout seul devant la seconde enceinte, au bas de l'Acropole. (XIII, 933-934)

この冷静さは、マトーの魔術的行動を幾分か弱めてもいる。彼にとって戦争とは恋、即ち「個人的仕事⁷⁹⁾」であった。ところが、「あの女はわしの全身をつつみ、骨の髄までしみこんでいる。まるでわしの魂になったようだ⁸⁰⁾」と彼の言ったサラムボーの存在が、今や、戦友に取って代わられる。「あの美しい女を自分のものにする幸福」の幻影を追ひ払い、戦友を「まるで自分の身体の一部でもあるかのように」愛すると同時に、「彼の頭には、なさねばならぬ一切のことが、明瞭にうかんできた⁸¹⁾」のである。

以上の分析を振り返ると、一連の侵入・合体の頂点を占めるマトーとサラムボーの抱擁は、侵入者側に理性的判断力を、被侵入者側には真実の発見をもたらし、両者に現実を直視する力を贈与したように思われるのである。これを直ちに、民族集団レベルに還元することはできない。けれども、両者がそれぞれの集団の代表者であると言える限りにおいて、フローベールが民族抗争について抱いていた次のような想いを、この合体は別の形で物語っていると考えられるのではなかろうか。合体は、《une fatalité des dieux》という人智の及ばぬ次元でのみ、実現されたのであるから。

Les guerres de races vont peut-être recommencer. On verra, avant un siècle, plusieurs millions d'hommes s'entretuer une séance. Tout l'Orient contre toute l'Europe, l'ancien monde contre le nouveau! Pourquoi pas? Les grands travaux collectifs comme l'isthme de Suez sont peut-être,

sous une autre forme, des ébauches et des préparations de ces conflits monstrueux dont nous n'avons pas l'idée!⁸²⁾

III

戦争における侵入は、既に述べたように、はるかに少ない。また民族の血の融合は実現されない。しかしながら、我々の考えるように、侵入・融合がこの小説の整合性の核であるとするなら、フローベールがこの観点から、史実上の人物にどのような役割を与え、どのような人物像を再創造しようとしたかは、極めて興味深い問題である。そこで我々は、カルタゴ攻城と、血の交流となるべきサラムボーとナルハヴァスの婚約を検討し、最後に、作者がどのような視点からカルタゴを再構成しようとしていたかを考察したい。

1. カルタゴ攻城

13章の半ば以上を占める包囲攻撃について、Sainte-Beuve は、それがポリュビオスの叙述から逸脱していると批難した⁸³⁾。この批難に対し、フローベールは次のように答えている。

Je m'incline devant ce qui suit. Vous avez raison, cher maître, j'ai donné le coup de pousse, j'ai forcé l'histoire, et comme vous le dites très bien, *j'ai voulu faire un siège*. Mais dans un sujet militaire, où est le mal? — Et puis je ne l'ai pas complètement inventé, ce siège, je l'ai seulement un peu chargé. Là est toute ma faute⁸⁴⁾. (強調フローベール)

作者が包囲攻撃を「誇張」したのは、Sainte-Beuve が考えるような「戦闘機械の名称を列挙する機会を設けるため」等々ではなく、我々が考察してきたように、城壁が民族階級の象徴として重要な意味を担っているからである。作者はゴール人オータリートたちの行動を通じ、城壁と民族意識の関わりを逆説的に語っている。カルタゴ城壁が傭兵・蛮族の破壊欲をそそくのは、それが純粋にカルタゴの象徴である限りにおいてなのだ。オータリートたちは、「ゴール式」につくられた第二の城壁に到達した時、「自分らの国の町をまえにしているような気がして、攻撃にも身

がはいらず、ついに撃退されて⁸⁵⁾」しまう。

城壁をめぐる攻防の描写は長きに亘るが、その中で最も熾烈であり、且つ肉体の衝突から性的イメージを想起させる一節を引用しておきたい。

Bientôt les deux foules ne formèrent plus qu'une grosse chaîne de corps humains, elle débordait dans les intervalles de la terrasse, et, un peu plus lâche aux deux bouts, se roulait sans avancer perpétuellement. Ils s'étreignaient, couchés à plat ventre comme des lutteurs. On s'écrasait. Les femmes penchées sur les créneaux hurlaient. On les tirait par leurs voiles, et la blancheur de leurs flancs, tout à coup découverts, brillait entre les bras des nègres y enfonçant des poignards. (XIII, 932)

さて、この小説において執拗に攻囲を主張するのが、スペンディウスである。まず6章において、唯一人、カルタゴに包囲攻撃をくわえることを要求した⁸⁶⁾。ウティカにあっても、傭兵たちが包囲に退屈し、「むしろ一戦をまじえた方がましだ」と思うのに対し、彼は策略を講じて開城を期す。

Du reste, il avait pratiqué des intelligences dans la ville et ne voulait point partir, sûr qu'avant peu de jours elle s'ouvrirait. (VIII, 840)

この姿勢は、くぼ地に陣地をかまえたハミカル軍を包囲した時も同様である。

D'après Spendius, il fallait garder soigneusement la position que l'on avait et affamer l'armée punique. (IX, 862)

カルタゴ攻囲では、長期の包囲に飽きて城壁から立ち去る傭兵がでる中、あくまでも攻城櫓の再建に努めるのである⁸⁷⁾。このような攻囲への執着は、スペンディウスの侵入者としての側面を強調するためであると思われる。傭兵軍の二大將であるマトーとスペンディウスは、この小説において、対照的ながらいずれも侵入者として描かれている。前者が神への畏怖に戦きながら、恋或いは性の次元で猛進する人物であるのに対し、後者は、戦闘の次元で策略による侵入を実現させようとする。しかも作者は、スペンディウスを初めから侵入に長じた人物として規定している。

« Je peux, comme une vipère, me couler entre les murs. » (I, 722)
« [...] je ne suis pas fait pour les batailles au grand soleil; l'éclat des
épées me trouble la vue; c'est une maladie, j'ai trop longtemps vécu
dans l'ergastule. Mais donne-moi des murailles à escalader la nuit, et
j'enterai dans les citadelles, [...] » (VIII, 853)

実際、マトーが「どう乗り越えたらよいかわからない」カルタゴ城壁から、安々と脱出に成功するのである⁸⁸⁾。

侵入の究極の形態である相互浸透への願望もまた、スペンディウスに認めることができる。マトーがサラムボーの「身体からでる香気をすおうとして鼻をふくらませる⁸⁹⁾」ように、彼は外気との一体感に酔う。

Spendius, la tête renversée et les yeux à demi clos, aspirait avec de
grands soupirs la fraîcheur du vent; il écartait les bras en remuant ses doigts
pour mieux sentir cette caresse qui lui coulait sur le corps. (II, 730)

このように作者は、侵入及び融合を、傭兵の代表マトーとスペンディウスによって、それぞれ違った形で見事に体现させたのである。

2. サラムボーとナルハヴァスの婚約

この婚約は『総史』に依拠している。しかしフローベールは、ナルハヴァスの登場時機、カルタゴへの寝返りの動機、等々の点で、独自の視点を導入し、ポリュビオスの記述を歪めている。一般に、作者によるこの変更は、Ferrère も指摘する如く⁹⁰⁾、サラムボーへの恋をめぐってマトーとナルハヴァスを対立させるためであると考えられる。しかし一方で、政治的利害が殊更強調されていることを忘れてはならない。『総史』では、同盟申し入れの動機は、カルタゴに対する「父親ゆずりの愛情」と「ハミルカルへの賞讃の念⁹¹⁾」とされている。が、この小説において、ナルハヴァスはハンノーに対しても「何やら手真似をしながら頭をさげて挨拶⁹²⁾」しているばかりか、「カルタゴの地方領土を蚕食して自国を強大にしよう⁹³⁾」と目論んでいる。恋の三角関係の萌芽となる1章の饗宴で、作者が既に、カルタゴとの同盟の使命をナルハヴァスに負わせていることに注目されたい。

C'était par hasard qu'il se trouvait au festin,—son père le faisait vivre chez les Barca, selon la coutume des rois qui envoyaient leurs enfants dans les grandes familles pour préparer des alliances; [...] (I, 720)

従って、この場で彼が、サラムボーとマトーの「婚礼」という戯れ言に敏感に反応するのは、単なる嫉妬に留まらず、政略結婚の意図も介在していたためと解すべきではなかろうか。

一方、ハミルカルは「ただ自分の政略に役立つ婚約のために彼女をとっておいたにすぎなかった⁹⁴⁾」。故に、娘が傭兵を情夫にしているという中傷が、この上もない屈辱であつたとしても、ヌミディアの王ナルハヴァスなら異民族であっても支障ない。ハミルカルの、「第二のカルタゴ」を建設しようとする遠大な計画⁹⁵⁾と、ナルハヴァスの領土拡張の目論見が、サラムボーを担保とする同盟に結びついたのである。『総史』のわずか一行で触れられたにすぎない婚約を発展させるにあたっても、フローベールはこのように、領土拡張という境界侵犯行為と民族の血の交流が表裏一体であることを強調している。

我々が一層注目すべきことは、次元の異なる二つの性の結合、即ち、戦史に基づくサラムボーとナルハヴァス、作者の創案であるサラムボーとマトー、が、実は通底するものだということである。前者が恋で潤色されたのとは逆に、「カルタゴのすべての財産も領土も艦隊も島も⁹⁶⁾」欲しくはないというマトーの純粋な恋情に、極めて巧妙な形で、政治的野心が挿入されている。

« [...] j'abandonne l'armée! je renonce à tout! Au delà de Gadès, à vingt jours dans la mer, on rencontre une île [...] Oh! je la trouverai, tu verras. Nous vivrons dans les grottes de cristal, taillées au bas des collines. Personne encore ne l'habite, ou je deviendrais le roi du pays. » (XI, 891)

しかも、マトーの語るこの夢の島は、婚約後ナルハヴァスとサラムボーが会見するハミルカル家の庭園と酷似している。この事実もまた、二組の性の結合が緊密な関係にあることを示唆するものだ。夢の島は地上の樂園かに思われる。

[...] , on rencontre une île couverte de poudre d'or, de verdure et

d'oiseaux. Sur les montagnes, de grandes fleurs pleines de parfums qui fument, se balancent comme d'éternels encensoirs; dans les citronniers plus hauts que des cèdres, des serpents couleur de lait font avec les diamants de leur gueule tomber les fruits sur le gazon; l'air est si doux qu'il empêche de mourir. (Ibid.)

これに呼応するかのように、ハミルカル庭園は緑が豊かに茂り、草木の香気が漂い、なごやかな空気に包まれている。加えて、ナルハヴァスは、結婚したら二人の部屋に「金の粉」をまこうと言う⁹⁷⁾。

異なる次元に帰属するはずの二つの「結婚」が、このように等質性を付与されている。このことから、戦争＝他民族の征服と恋＝女の所有の両者を、フローベールが等価なものとみなし、侵入及び融合という欲望の観点から、両者を統合しようとしたのだと結論することが許されよう。その意味で、ナルハヴァスがサラムボーの胴に左腕をまわした途端、彼女が急死し、実現されなかった二人の合体は、カルタゴの第二城壁まで到達しながら、終にそれを乗り越えられなかったマトーの失敗にも重ね合わせることができる。カルタゴ城壁の侵入に成功したナルハヴァスは、サラムボーとの合体に失敗し、彼女との合体を成就したマトーは、カルタゴ侵入に失敗したのである。

3. カルタゴの排他性と閉鎖性

ナルハヴァスの同盟申し入れを受諾したハミルカルの言葉、「共和国がそなたをどうあつかうかは知らぬが、ハミルカルは決してこの恩を忘れぬぞ!⁹⁸⁾」は、議会と頭領の対立を暗示している。両者の確執は何にもまして、異民族への態度の相異に原因をもつ。傭兵を「恩恵や特権によって共和国の味方につけておけば、どれほどの利益があるかわからぬ⁹⁹⁾」と言い、彼らを統率してローマ征服に意欲を燃やしたハミルカルは、自己の利害に応じて異民族を賞讃もすれば、せん滅もするという柔軟性をもつ。ところが、カルタゴは「地方領土の補助がなければ生きてゆけない」にも拘わらず、「近隣の部族をしほりあげ¹⁰⁰⁾」ている。このカルタゴの排他性を最もよく体现する人物がハンノーである。

C'était un homme dévot, rusé, *impitoyable aux gens d'Afrique*, un vrai Carthaginois. (VI, 790)

また、城壁がカルタゴ民族の象徴であるように、カルタゴ人民一人一人の閉鎖性は、家の壁や扉に象徴される。カルタゴの住居は実に様々な囲いで区分されている。

De petits murs en cailloux, des rigoles d'eau vive, des cordes de sparterie, des haies de nopals séparaient irrégulièrement ces habitations, [...]
(VII, 819)

そして、傭兵に脅えるカルタゴ、不安におののく神官の姿が、城壁や固く閉ざされた扉に投影されるのである。

Comme par les temps de peste, toutes les maisons étaient fermées; [...]
(VI, 790)

Ils (=les pontifes de la Rabbetna) se tenaient enfermés dans la troisième enceinte, inexpugnable comme une forteresse. (XIII, 925)

ハミルカル次の言葉は、壁を固守するこの閉鎖的カルタゴへの非難に他ならない。

—Que faisiez-vous cependant, ici, à Carthage, dans vos maisons, derrière vos murs? (VII, 813)

しかし、カルタゴにとって城壁を遺棄することは、祖国存亡の危機である。共和国最後の象が城外へ連れ出されてくるのを見た、カルタゴ兵の想いに、それが示されている。

Alors il sembla aux Carthaginois que la Patrie, abandonnant ses murailles, venait leur commander de mourir pour elle. (XIV, 982)

薄氷の勝利にせよ、カルタゴは城壁を死守し、「人々は戦争で破壊された穴を埋め¹⁰¹⁾」、秩序は回復する。が、「驚の叫びと廃虚の山のほかは何もなくなるだろう。カルタゴよ！そなたは没落するのだ！¹⁰²⁾」というハミルカルの予言は、遠からず実現する。この意味で、典型的なカルタゴ人ハノンノーの涙を流す顔が、廃虚の壁に

喩えられるのは、極めて象徴的であると言えよう。

[...] , et des pleurs coulaient sur sa face comme une pluie d'hiver sur une muraille en ruine. (VII, 813)

作者がハンノーを「象皮病」患者に仕立て、物語の進行とともに病気を進ませたのは、内部から腐敗してゆくカルタゴを、彼において象徴するためだと、既に指摘されてきた¹⁰³⁾。作中人物中、最も美しいサラムボーと最も醜いハンノーが、いずれも似通ったきらびやかな衣裳や装身具を身に纏いながら、それぞれ、光り輝くカルタゴ帝国の失墜と、排他性による必然的崩壊を象徴しているのである。

結 論

フローベールは、カルタゴ城壁を傭兵・蛮族とカルタゴ帝国の境界と定め、この民族階級の象徴を破壊するという一種の冒瀆的願望を戦争の本質として位置づけた。このために、傭兵側の代表マトーとスペンディウスは、何よりも、侵入者として提示され、また、『総史』からの逸脱をも辞さず包囲攻撃が誇張されたのである。そして作者は、マトーとサラムボーの魔術的恋を創案することにより、聖なる境界を侵犯する欲望を、一層鮮やかに浮き彫りにしてみせた。侵犯行為の困難、重大性を増すため、マトーには神への畏怖が、サラムボーには神性が付与されている。この恋の次元では、侵入及び合体が、対称的構成によって緊密に連関しながら、マトーとサラムボーの抱擁を頂点にもつ。それは、戦争の次元における傭兵たちの究極的願望でもある。性の結合は、彼らが夢みた異民族間の血の交流に他ならない。この戦いは、単なる領土侵犯のみならず、民族の融合をも志向していたのである。戦争と恋が表裏一体をなすものであるのは、次元の異なる二組の「結婚」——マトーとサラムボー、ナルハヴァスとサラムボー——が等質化されていることから明らかになる。

この侵入と融合の観点からすれば、カルタゴを象徴する二人の人物、サラムボーとハンノーの対照は、極めて深い示唆を含んでいるように思われる。前者は傭兵との合体を通じ、死と同時に真実を発見するに至る。一方、異民族に残虐な後者は、「岸边でしめころされる海の怪物¹⁰⁴⁾」に喩えられる悲惨な最期を遂げる。テキスト分析からのみ、作者のカルタゴ解釈を導き出すのは危険であろう。しかし、Anne

Greenが、綿密な文献資料調査及び草稿検討を通じ、この小説で描かれたカルタゴに、1848年当時のフランスの政治・経済・社会状況が、色濃く投影されていることを実証してみせた¹⁰⁵⁾。「現代生活への嫌悪がむかわしめた隠遁の地¹⁰⁶⁾」とされた『サラムボー』が、実はフランス社会批判でもあったとするなら、ここに、民族抗争に対する作者の解釈を読みとろうとするのも、あながち誤りではあるまい。カルタゴは、自己同一性の確証、自らの排他的閉鎖性を象徴する城壁を死守した。しかし、その末路はハンノーの姿に予示されている。フローベールは、サラムボーの死と解放を描くことによって、カルタゴ帝国の失墜にこそ逆に、帝国の発展と希望の可能性がありえたのだと、暗示しているのではなかろうか。

註

作品及び *Sainte-Beuve* 宛ての手紙からの引用はすべて、Gustave Flaubert, *Œuvres*, t. I, édition établie et annotée par Albert Thibaudet et René Dumesnil, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1951 による。日本語訳は田辺貞之助訳（『フローベール全集2』筑摩書房）を使わせていただいたが、引用の便宜上若干の変更を行なっている。引用文末尾の（I, 709）は Ch. I, p. 709 を意味する。また引用文中のイタリック体による強調は、特に断わりのない限り、すべて引用者によるものである。

- 1) in *Poétique*, N° 6, 1971, pp. 145–154
- 2) *The Novels of Flaubert, a Study of Themes and Techniques*, Princeton University Press, Princeton, 1966, pp. 115–116.
- 3) 代表的なものとして、以下のものが挙げられよう。

R. B. Leal, « *Salammbô: An Aspect of structure* » in *French Studies*, XXVII, 1973, pp. 16–29

D. L. Demorest, *L'Expression figurée et symbolique dans l'œuvre de Gustave Flaubert*, Slatkine reprints, Genève, 1967, pp. 481–522

Jacques Neefs, « Le Parcours du zaïmph » in *La Production du sens chez Flaubert*, Union générale d'éditions, Coll. « 10/18 », 1975 pp. 227–252
- 4) Brombert, Op. cit., p. 114

- 5) *L'Esthétique de Gustave Flaubert*, Slatkine reprints, Genève, 1967, p. 277
- 6) IX, 857
- 7) Conard 版 (éd. Lemerre, Paris, 1879 に従っている)では ports となっている。
- 8) XII, 913
- 9) XII, 911
- 10) XIV, 971
- 11) 1862 年 12 月 Sainte-Beuve宛ての手紙。Op. cit., p. 1002
- 12) Polybe, extrait de *L'Histoire générale* in *Œuvres complètes de Gustave Flaubert Tome 2*, Club de l'Honnête Homme, 1971, pp. 471–2
- 13) II, 726
- 14) VII, 803
- 15) Op. cit., p. 286
- 16) II, 726–7
- 17) IV, 753
- 18) Anne Green, *Flaubert and the historical novel*, Cambridge University Press, 1982, p. 65
Richard Sherrington, *Three Novels by Flaubert*, Oxford University Press, London, 1970, pp. 173–6
- 19) H. Levin, *The gates of horn: a study of five French realists*, Oxford University Press, New York, 1963 Sherrington の引用による。Op. cit., p. 176
- 20) IV, 761
- 21) VI, 788
- 22) 草稿 (folio 200) Anne Green の引用による。Op. cit., p. 101
- 23) IV, 761
- 24) XI, 889
- 25) IV, 755–6
- 26) Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p. 131
日本語訳は戸田吉信訳 (『フローベール論』冬樹社) を使わせていただいた。
- 27) XI, 888
- 28) XII, 909
- 29) II, 736
- 30) Polybe, Op. cit., p. 483

- 31) Op. cit., p. 276
 32) Op. cit., p. 114
 33) I, 716
 34) VIII, 839
 35) XIII, 964
 36) I, 718
 37) 例えば、神殿内の泉水に「サラムボーの館のに似た魚がおよいでいる」のをはじめとし、ハミルカルの庭園の「空色の地面」 *la terre couleur d'azur* が、神殿の庭の「青い砂利をしきつめた道」 *le chemin, pavé de cailloux bleus* に重なる。以下同様に、白い花の列がえがく「長い拋物線」 *de longues paraboles* と銀線細工の垣の「大きな半円形」 *une large demi-cercle*、叢林の「あつい甘やかな匂い」 *des odeurs chaudes* と西洋杉の仕切りからあおりつける「温気」 *la chaude atmosphère*、「血みどろの円柱のような朱をぬりたくった木の幹」 *des troncs d'arbres barbouillés de cinabre, qui ressemblaient à des colonnes sanglantes* と「彩色した円柱」 *les colonnes peintes*、そして、「大きなガラス玉をのせた十二基の台座」と怪獣にささえられた「青い水晶の十二の球」が、それぞれ呼応している。加えて、このガラス玉の「今にもまたたきしような巨大な瞳かと思われる赤味ばしった光」 *des lueurs rougeâtres, comme d'énormes prunelles qui palpitieraient encore* は、女神の「大きな瞳」 *ses grands yeux fixes* 及び「赤銅の鏡に反射する、額にはめこまれたきらめかしい石」に結びつけられよう。（なお、ハミルカルの庭園の引用はすべて I, 716, 神殿の描写の引用は V, 771-3 からである。）
 38) V, 771
 39) V, 772
 40) V, 773
 41) マトーがハミルカル館へ赴く時、燈台の「大きな赤い光」 *une grande clarté rouge* が空を照らしている。サラムボーの部屋には「楕円形の水盤」 *un bassin ovale* があり、「えもいわれぬ芳香」 *des senteurs exquis* が漂う。寝床は、「空色の大きな四角」 *un grand carré d'azur* の釣床である。
 42) V, 773
 43) V, 777
 44) V, 780

- 45) V, 778
- 46) V, 781
- 47) V, 776
- 48) discussion in *La Production du sens chez Flaubert*, Union générale d'éditions, Coll. « 10/18 », 1975 pp. 244-5
- 49) Op. cit., p. 114 引用はそれぞれ, V, 767, 770, 776
- 50) VI, 784
- 51) X, 875
- 52) 1862 年 12 月 Sainte-Beuve宛ての手紙。Op. cit., p. 998
- 53) X, 870
- 54) « *Salammô* par Gustave Flaubert » 1862 年 12 月 22 日 *Constitutionnel*

誌に発表された。ここでの引用は *Œuvres complètes de Gustave Flaubert* Tome 2, Club de l'Honnête Homme, 1971, p. 429 による。

- 55) 1862 年 12 月 Sainte-Beuve 宛ての手紙。Op. cit., p. 1001
- 56) X, 869
- 57) I, 719
- 58) I, 719
- 59) VII, 814
- 60) VI, 799
- 61) XI, 881-2
- 62) V, 779-780
- 63) XI, 885-6
- 64) XI, 894
- 65) Op. cit., p. 154
- 66) 草稿 (folio 193) Anne Green の引用による。Op. cit., p. 104
- 67) Sherrington の指摘にもある。Op. cit., p. 214
- 68) XIV, 970
- 69) XIV, 952
- 70) III, 749
- 71) XI, 882
- 72) Conard 版では, « elle ne voulait pas qu'il mourût! A ce moment-là, Mâtho eut un grand tressaillement » が削除されている。
- 73) X, 873

- 74) X, 872
- 75) XI, 892
- 76) Op. cit., p. 153
- 77) XI, 888
- 78) Rousset の言葉。Op. cit., p. 153
- 79) IX, 863
- 80) II, 735
- 81) XIV, 979-980
- 82) 1870 年 8 月 3 日 George Sand 宛ての手紙。Thibaudet の引用による。
Op. cit., p. 136
- 83) Op. cit., pp. 431-2
- 84) 1862 年 12 月 Sainte-Beuve 宛ての手紙。Op. cit., p. 1002
- 85) XIII, 932-3
- 86) VI, 788-9
- 87) XIV, 952
- 88) V, 782
- 89) XI, 887
- 90) Op. cit., p. 279
- 91) Op. cit., p. 478
- 92) VI, 801
- 93) XI, 896
- 94) III, 750
- 95) VII, 804, 及び XI, 897
- 96) XI, 888
- 97) [...] Le jardin, depuis longtemps inculte, avait multiplié ses verdure; des coloquintes montaient dans le branchage des canéficiers, des asclépias parsemaient les champs de roses, toutes sortes de végétations formaient des entrelacements, des berceaux; et des rayons de soleil, qui descendaient obliquement, marquaient çà et là, comme dans les bois, l'ombre d'une feuille sur la terre. [...] Les clameurs de la ville, au loin, se perdaient dans le murmure des flots. Le ciel était tout bleu; pas une voile n'apparaissait sur la mer. (XIV, 969-970)
[...], et les appartements de leur maison seraient sablés avec de la poudre d'or.

Le soir tombait, des senteurs de baume s'exhalaient. (XIV, 970)

- 98) XI, 897
- 99) VII, 815
- 100) VI, 786-8
- 101) XV, 985
- 102) VII, 814
- 103) Anne Green, *Op. cit.*, p. 54, 及び Jacques Neefs, *Op. cit.*, p. 233
- 104) XIV, 974
- 105) *Op. cit.*, Ch. 4, 及び Ch. 5 (pp. 58-93)
- 106) 1859年11月29-30日 Ernest Feydeau 宛ての手紙。Thibaudet の引用による。*Op. cit.*, p. 126